

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第148号

草創期の  
柿生中学校 - 12

## 校歌・校旗の誕生

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

◆校歌の誕生、校旗の誕生◆ 柿生中学の校歌は、創立9年目の昭和31(1956)年にお披露目され、校旗は10周年を記念して、創立10年を迎えた昭和32(1957)年に作成されました。創立の年昭和22(1947)年は、戦後の混乱期にあり、この連載の第1回に記したように、新制中学校の創立自身が、GHQによる教育改革の一環として、十分な準備期間もないままに出発したものでしたから、まずは教室や教材、教員の確保が先決でした。そのため開校に合わせて校歌や校旗を制定することにまで、手が回らなかったのです。事情は理解できるのですが、それにしても、開校10周年を迎えるまで、校旗がなかったとか、開校から9年間も校歌が作られなかったというのは、遅すぎる気がします。

何故そんなことになったのか。創立時に必要な校地・校舎を確保できず、柿生小学校の好意で、小学校の校舎の一部を間借りする形でスタートした柿生中学校は、2年目に入学してくる新1年生分の教室がなかったのです。不足する教室は近くの公民館や旧青年学校の校舎を使つての分散形式で凌ぐしかありませんでした。昭和29(1954)年になってようやく分散形式は解消したものの、グラウンドは1周およそ120mの楕円形のトラックがやっととれる狭さだったのです。その上、当時の柿生周辺には、まだ水道は引かれておらず、水の確保は山側に掘った汲み上げ井戸と、調理室の近くに約40m掘り下げたポンプ井戸に頼るしかなかったのです。ポンプ井戸のポンプは比較的頻繁に故障しましたから、その修理も大変でした。当然、体育館やプールなど望むべくもありませんでした。

日々の苦勞が大きかったため、校歌や校旗の制定まで、考えをめぐらすことが出来なかったのでしょう。ようやく校歌が制定されたのは、昭和31(1956)年、3代校長磯岡寛先生の就任4年目のことでした。ただ、生徒たちは、正式の校歌ではなかったのですが、森健夫先生作と伝えられる「混沌の世に彷徨える 祖国の再起図らんと清き心の若人が 柿生が丘に集い寄る」(題名不詳)と声高らかに歌っていたと、当時の1年生11期生の遊佐隆昭さんは書いています(『創立三十周年記念誌』)。校歌は磯岡校長が、玉川大学の田中末広先生に作詞を、同大の西崎嘉太郎先生に作曲をお願いし、両先生の尽力で、同年12月10日にお披露目されました。当時としては珍しい混声4部合唱のメロディーからなり、今日に至るも愛唱されています。「朝明けの紅燃えて…」に始まり、『榮えよわれら柿生中学』で終わる、あのお馴染みの曲です。生徒たちは立派に混声合唱を歌いきったそうですから、柿生中学の音楽教育のレベルは、当時から高かったのですね。



3代校長  
磯岡寛先生



校旗を先頭に入場する柿生中学校生徒  
(創立10周年記念全市合同大行進  
昭和32年10月)

校旗の作成はもっと大変でした。校旗の図案は、美術科の吉岡節子先生にお願いして、紫地の中央に大きく校章を据え、校章の周囲に地元の名産禅寺丸柿をあしらったスッキリしたデザインが出来上がり、学校中に好評でした。問題は校旗作成の資金にありました。どこにも予算がなかったのです。事情を知ったPTAの皆様がOBたちをも巻き込んで奔走してくださり、費用の殆どを寄付してくださったのです。こうしてできたばかりの校旗は、昭和32(1957)年7月15日の創立10周年記念式で無事にお披露目できたのです。初代の旗手には10期生(3年生)の岡本朋久さんが選ばれ、10月に開かれた「10周年記念全市中学校合同大行進」に、重い校旗を堂々と掲げ全市の関係者に校旗を見てもらうことも出来たのです。岡本旗手は、「柿中には校旗がなく、中体連陸上大会で寂しく思ったので、校旗をもつての行進はとても嬉しかった。」と語っています。 続く

鶴見川流域の中世  
その8

## 源平の争乱を生き抜いた武士 小山田有重

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

小山田別当有重は鶴見川源流部の小山田庄(保)を本拠として、治承・寿永の内乱(源平の争乱)を生き抜いた武士である。有重は源家の家人から平家の家人になり、さらに源頼朝と主従関係を結び御家人になっている。有重の動向を『平家物語』や『吾妻鏡』等から読むと、激動期を生き抜いた老練でたたかな姿が浮かび上がってくる。

有重は『尊卑分脈』によると祖父の重綱は秩父権守(出羽権守)を称し、父の重弘は太郎大夫を称した秩父平氏の嫡流の出身である。重綱は武蔵国留守所惣検校職と呼ばれる国司に次ぐ地位に就いて、在庁官人を指揮し国務を掌握した。同職は重綱の嫡流が代々世襲しているの、秩父平氏はこうした権限を梃子にして国内に勢力を広げたのであろう。その一族の畠山・河越・江戸・豊島・葛西・渋谷・中山氏等は一郡から数郷・荘園規模の勢力を持って、武蔵国で最大の武士団を形成した。なかでも畠山・小山田は有勢な武士団であると『源平盛衰記』は記している。

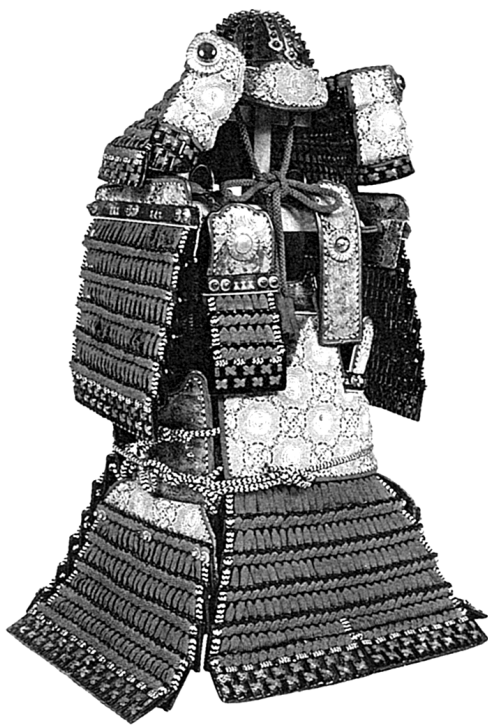
有重は小山田別当と称しているが、別当とは勅旨牧の管理者である牧別当であることは多くの研究者が指摘している。馬は戦争や物資の輸送に不可欠の存在だった。小山田庄(保)は由比牧・小野牧に連続する馬牧の適地であり、武蔵国府の南に位置して、流通の大動脈である鎌倉街道上道が南北に貫通している。その子息たちは、小山田五郎行重は小山田庄(保)を受け継ぎ、稲毛三郎重成は鎌倉中道が通る摂関家領稲毛庄(川崎市中原区・高津区)に、榛谷四郎重朝は鎌倉上道が貫通する伊勢神宮領榛谷御厨(横浜市旭区二俣川付近)にそれぞれ進出している。小山田一族は武蔵府中に通じる幾筋もの幹線道路を押さえる様に、多摩川・鶴見川・帷子川流域に勢力をのばしている。

有重は源家の家人であったが、平治元年(1159)の平治の乱で源義朝が討たれ、武蔵国が平清盛の知行国になると平家の家人になった。

治承4年(1180)に源頼朝が伊豆国に平家打倒の兵を挙げた。このとき有重は兄重能と共に大番役のために在京していた。そのまま4年間京都に留められていたが、寿永2年(1183)砺波山合戦で木曾義仲軍に敗れた平家方は、重能・有重兄弟を召し出して「汝らは戦場経験の豊富な老練な武士である。戦いのやり方を指図せよ」と命じ、兄弟を北陸道の前線に向かわせた。重能・有重は加賀国篠原(石川県加賀市)で木曾義仲方の今井兼平軍と、長時間に渡り激闘を繰りひろげ今井方の多くを打ち取ったが、畠山方も家子郎党の多くを失い退いている(『平家物語』)。その後、西海に落ちる平家方の命令で一旦は斬られる事になっていたが、平知盛等のとりなしで許されて関東に帰ることができた。有重は源頼朝の御家人になっている。重能は家督を重忠に譲り隠居したのであろう、その後の消息は伝わっていない。

『吾妻鏡』には有重の人物像を語る印象深い話が伝わっている。元暦元年(1184)6月16日、甲斐源氏の嫡流一條(武田)忠頼が、頼朝の御所に招かれ酒宴が開かれた。頼朝は工藤祐経に命じて、かねてから威勢を振るい頼朝の統制に従わない忠頼を、酒宴の席で討取る手はずであった。ところが、祐経は緊張のあまり顔色が変わり、忠頼に気付かれそうになった。これを見た有重は席を立て、「このような席でのお酌は、年寄りの勤め」と祐経の持っていた銚子を取って、重成・重朝も盃と肴を手にして共に忠頼の前に進み出た。そこで有重は二人の子息に向かい諭して「給仕の際の故実では、袴の裾は万一の場合に備えて括り結ぶものだ」。二人が手にした物を置き、括りを結んで忠頼の注意をそらした。その間に天野遠景が別の命令を承っており、太刀を取って忠頼を討取っている。有重の機転によって忠頼を討ち果たすことができた。古兵(ふるつわもの)の有重の面目躍如といったところである。

小山田地区には小山田氏館跡といわれる大泉寺がある。小山田No.1遺跡からは掘立式建物、地下式坑や宋銭ひとさし(97枚)等が出土している。No.12遺跡の周辺部には窄場(さくば)、牧畠、馬駈などの馬牧に関連するような小字名が残されている(『小山田遺跡群』)。(つづく)



武蔵御嶽神社大鎧 『宝物集』より転載



シリーズ  
教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(4)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆寺子屋の展開過程 その2 寺子屋の教育◆

寺子屋では、どのような教育が行われたのでしょうか。現在の教育とははっきりと違っていることは、寺子屋では入門年齢や卒業年齢が決まっているわけではなく、入門の時期も決まっていなかったことです。入門させたい子どもを、親が師匠の下に連れてゆき、入門が許可されれば、その日から通うことが出来たのです。大抵の寺子屋にとって、教場は一部屋ですから、年齢も学びのレベルもまちまちの子ども達が、そして男の子も女の子も皆一緒でした。

教育熱の高まりを背景に、寺子屋の開校数が飛躍的に増えた19世紀を例にとると、授業は毎朝7時半ごろに始まり、午後2時半ごろに終了するのが常でした。ただし、大暑の季節は午前中だけの半日授業になったのですが、年間のお休みは50日程度で、夏休みのような長い休みはなく、今の学校よりも遥かにハードでした。学習内容はというと、登校した寺子は、まず師匠に挨拶すると、すぐに師匠からその日の課題を与えられ、課題に沿って学習を始めるのが常でした。寺子の年齢や学習の進展度は個々マチマチでしたから、師匠は夫々の子ども達の間を巡回したり、1人1人を呼び出して課題の仕上げ具合をチェックしたりと、寺子屋は個別指導の側面が強かったのです。

寺子の習熟度はマチマチでしたが、全員が読み方を学ぶ時間、書き方を学ぶ時間、読書(本の読み方)の時間、そして算術を学ぶ時間といった大枠は定められていました。内容はマチマチでしたが、寺子全員が読みなら読み、習字なら習字を一斉に勉強したのです。これは寺子向けというより、師匠筋や世間に向けて書かれた書物と言えるのですが、寺子屋教育が目指すべき目標を記した書物が、江戸時代前期と中期を分かつ元禄時代(1688~1704年)以降数多く出版されています。今、元禄8年(1695)に大阪で出版された『寺子制誨之式目』を例にとると、手習いを通して筆の持ち方、墨の摺り方、紙の扱いを手始めに、言葉遣い、師弟関係、友人関係、さらに食事時の作法や身づくろいまで、日常生活の隅々にまで及ぶ躰についてまで、説き及んでいます。さらに「心が正しくなければ、筆も正しくならない」と、孝行や正直など日常生活における心の持ちようにまで踏み込んでいます。ここには、手習いによって社会生活に必要な知識を学習させるだけでなく、後に寺子屋教育の特筆の一つに数えられる道徳教育への拘りが記されています。さらに、年長の兄弟子に対して、年少の弟弟子を不完全な者、ふつつかなダメな奴と見ないで、その人間性を認めた上で、真の人間となるよう善導するよう諭して筆を閉じています。寺子屋では年長の寺子が、年少の寺子の学習を手助けすることも、普通に行われていました。こうすることで、師匠が年長の寺子の指導に力点を置くことが出来たからです。

寺子屋に入学した子どもたちは、親と共に師匠に面接して、どの級に入るのが妥当か判断していただき、自分が入るべき級を決められます。教室の座席は級ごとに決められており、周囲数人が同じ教材で学習するのですが、入門の時期がマチマチであったように、進級についても、現在のような一斉進級は行われず、師匠の判断によって進級を認められたり、同じ級に留め置かれたりしたのです。師匠が初級の読みは十分にマスターしたとか、平仮名は自由に書けるようになったなどと判断すれば、上の級に進めたのです。中には、1年近く(通常は進みの遅い寺子でも半年程度で次の級に進みました)も初級のレベルに留まったままの子もいれば、1年の間に、2回も3回も進級する子もいたのです。それが寺子屋でした。

幕府は、寺子屋についても、男女別学が望ましいとしていたのですが、町人や農民の世界ではそれが難しく、実質的には教場内で席を分ける程度しか出来ないのが現実でした。ただ、江戸や大阪など大都市の寺子屋の師匠に限ると、およそ3人に1人が女性の師匠でした。大都市では女兒の就学率が高く、家庭からも裁縫や手芸、行儀見習いなどの要望が強かったことが、女性師匠の進出を後押ししたからです。

(続く)

寺子屋の女性師匠と寺子  
読み本の表紙

寺子をやさしく指導する女性師匠

## 令和2年度 柿生郷土史料館友の会 会員紹介 (8月1日現在、順不同・敬称略)

本年度の「友の会」法人会員の皆様ならびに個人会員数をご紹介します。当館の活動を支えていただき、深く感謝いたします。当館は地域の皆様のご支援とご協力により運営しております。

地 区	法 人 会 員			個人
上麻生	常安寺 (医)総生会麻生病院 (株)ティエムコーポレーション (株)美容室ルシル (株)北島工務店 (有)鴨志田産業(まきば) (学)川崎青葉幼稚園 セシサ川崎柿生支店 川崎信用金庫柿生支店	月読神社 (株)飛島典礼 (株)富士建材 プライマリー(株) (福)柿生アルナ園 (有)柿生恒産 リック設計企画(有) 小料理わかば 喫茶ベル	誠和産業(株) 奈良工業 柿の実幼稚園 柿生保育園 (有)山義産業 (有)孝友商事 とん鈴	17名
下麻生	(有)麻生自動車	サイトー農芸		12
王禅寺	王禅寺			1
王禅寺東	琴平神社 (有)荒川電気工事	(株)朝日ホーム (有)青戸建材	(株)観財 (株)タカミ	17
王禅寺西	(有)アクティブ			7
白山				1
早野				1
虹ヶ丘				1
岡上	(有)ステップオン			11
片平	長瀬土地家屋調査事務所	(株)Slow Farm		6
五力田				3
古沢				1
白鳥	(有)法友			
栗木	(学)桐光学園			3
栗木台				6
黒川				3
はるひ野	(有)ユーコーポレーション			
万福寺	(有)白百合商事			
高石				1
他市内				7
他県内				4
町田市	(株)エムケープリント	(学)和光大学		1
他県外				4

## 柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**9月** 6・20・27日(毎日曜日) **10月** 3・10・17・31日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (9月13日、10月24日は休館です)

### 第18回 特別企画展

### 続 戦中・戦後の教科書展

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

期間 6月27日(土) ～ 9月27日(日)

会場 柿生郷土史料館特別展示室